

ストリートダンスは採点競技になるべきなのか

スポーツマネジメントゼミナール 1314040 津波 太郎

1. 研究動機・研究目的

ダンスとは、体を動かして身体的コミュニケーションを図り、自己表現をする際に使われる行為であり、その歴史は古く、世界各国に存在している。ダンスの起源は定かではないが、宗教の儀式に使われたり、お祭りの際に踊ったり、感情表現、神への雨乞いや豊作の願い、様々な用途でダンスが行われていたとされている (NOA ダンスアカデミー, 2017)。しかし、ストリートキングスやユースオリンピックなど採点項目が明確なダンスバトルの発足、プロダンスリーグの設立とストリートダンスの競技化が進みつつある環境である。ダンスはよりスポーツに近づいている傾向にある。しかし、我が国のダンス教育において模倣を否定してきたという歴史的背景 (松本, 2012) があることから、自由や即興性が重んじられてきたという伝統と現実には乖離が生じていると思われる。はたして、ストリートダンスは競技化されるべきなのだろうか。

本研究では、ストリートダンスに評価基準を設けるべきなのか、ストリートダンスの歴史、現状、展望をもとに、今後のストリートダンスの発展について考察していきたいと考え、本研究に着手することとした。

2. 研究方法

本研究では、ストリートダンサー、コンテンポラリーダンサー、ストリートダンスサークル所属の大学生に対し、質問項目に沿ってインタビュー調査を実施した。

- 1) 調査対象者：ストリートダンサー1名、モダンダンサー1名、ストリートダンスサークル所属の大学生4名の計6名であった。
- 2) 調査期間：2017年6月16日～9月14日の3カ月間。
- 3) インタビュー方法：事前に用意した8の質問項目に沿って、約40分程度の半構造化インタビュー調査を1対1又は1対4で行った。
- 4) 分析方法：インタビュー調査後に文字化し、その文字化されたインタビューの内容は、質問内容ごとに分類作業を行った。複数回にわたり各項目の内容を簡略化することで内容を要約し、それぞれの組織間において共通項や相違点などのキーワード探索を試みた。具体的なデータ分析として、グラウンデッド・セオリーアプローチ (Grounded Theory Approach: 以下 GTA) を援用した。

3. 主な結果と考察

ストリートダンサーはダンスをする上で、「独りよがりにならないこと」、「人、音と会話をイメージで踊る」といったことを大切にしており、競技性よりも遊戯性の方に重きを置いていることが分かった。しかし、バトルなどダンスを採点することに対しては、歴史的

にバトル文化があるからいいと思うと考えており、人前で踊る機会が増える、つながりが増える、刺激になるなどの様々ないい面があるということが分かったが、「明確な採点基準」になると、ストリートダンスではなく別のカテゴリーのダンスになるのではないかという懸念があることが分かった。コンテンポラリーダンサーは、「明確なテーマの表現」、「お客さんに向けた表現」といったことを大切にしており、競技性よりも遊戯性の方に重きを置いていることが分かった。ダンスが採点されることについては、個性と自己表現が点数に反映されないのではないかということに懸念している。ダンスを採点するにあたって、「表現性」、「こだわった動き」、「テーマにあった表現」といった不明確な観点を重視していることもあり、採点項目が明確になると、採点が味気なくなり、面白みが少なくなってしまうのではないかということが考えられていることが分かった。ダンスサークルに所属する大学生は、「みんなと踊ること」、「音に乗って踊ること」、「自己表現をすること」を大切にしており、競技性より遊戯性の方に重きを置いていることが分かった。バトルなどの採点されることに対しては、メリットもデメリットもあることが分かった。成果が可視化されるため、モチベーションにつながり、ダンスのスキルアップが効率的に進むということが分かった。しかし、明確な採点基準があると、個性や自己表現が反映されないというのは反対であるという意見もあった。3者ともストリートダンスを競技性より遊戯性が高いもので見ていることが分かる。また、ストリートダンスを採点する一つの文化であるバトルは、いいものであり、人前で踊る機会が増える、つながりが増えるといったストリートダンサーと学生、キッズをつなぐ環境になっているという考え方があったが、「明確な採点基準が設けられること」が、ストリートダンスではなく別のダンスのカテゴリーになってしまうという懸念が挙げられた。

4. 結論

3者とも従来のダンスバトルに対しては、歴史的にもバトルが行われていた、人前で踊る機会が増える、刺激になるなどの理由で賛成意見であった。しかし、明確な採点基準という点に難色を示していることが分かった。ストリートダンスの良さは、自己表現であり、音に乗りオリジナリティを出し踊ることであると考えられているため、明確な採点基準が設けられるとそこが形骸化されてしまうという理由からであった。また、このようなバトルイベントが誕生したのも、今現在注目されているストリートダンスシーンをさらに拡大させるための一つの方策ということも分かった。カルチャーを尊重しつつ、シーンを拡大させる様々な方策を打ち出していく必要があると考える。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を作成するにあたり、ストリートダンスへの理解が深まり、かかわり方、考え方が変わるきっかけになりました。今後ともストリートダンスに関わっていき、動向を見ていきたいと思いました。そして、幾度にわたって丁寧にご指導していただいた小笠原悦子教授に深く感謝いたします。8カ月間、ともに切磋琢磨してくれたスポーツマネジメントゼミナールのゼミ員たちにも深く感謝いたします。また、本研究のインタビュー調査に快く協力していただいたダンサーの方々、J大学のダンス部の皆さんにも心より感謝の意を表します。